

ご復活、おめでとうございます！

戦争を始めるのは普通の人々ではなくいつも政治家たちです。これはノーベル賞作家のスヴェトラナ・アレクシエーヴィッチの言葉です。そして被害を受けて傷つけられるはいつも普通の人々です。大切な日常、家族に朝食を用意して、子供にお弁当をつくっていたお母さんたちは、今、家を奪われ戦火の中を逃げ惑っています。家族のために暖かい料理を、子供たちにはお弁当をどんなに作りたかったことかと思ひます。子供たちはどんなにお友だちと学校へ行きたかったことでしょうか。朝ごはんを作りながら、そのことを強く思う四旬節を過ごしました。



復活されたイエスに祈ります。戦いを終わらせて下さい。どうぞ普通の人々のささやかで平和な日常を取り戻して下さい。

第46回日本カトリック映画賞 決定

『梅切らぬバカ』 和島香太郎 監督 / 2021年作品

今年のカトリック映画賞は和島香太郎監督の『梅切らぬバカ』となりました。

今回は、日本で生きる2人のクルド人の青年を扱った日向史有監督のドキュメンタリー映画『東京クルド』、ベトナムから技能実習生としてやって来た3人の若い女性たちを描いた藤本明緒監督の映画『海辺の彼女たち』、福島県・南相馬にある経営が傾いた映画館『朝日座』を再建しようとオーナーや町中を巻き込んで奮闘する若い女性を描いたタナダユキ監督の『浜の朝日の嘘つきどもと』そして、50歳を迎えようとする自閉症の息子を持つ母親と周りの住民の様子を描いた和島香太郎監督の『梅切らぬバカ』の4作品が候補に挙がり、『梅切らぬバカ』を日本カトリック映画賞に決定しました。



この映画のオープニングは、山田家親子の隣に引っ越してきた里村家から、親子の家の庭から道へ伸びた梅の枝が通行の邪魔になる、という苦情が持ち込まれたことから始まります。この梅の木は、先立った夫が植えたもので、息子にとっても、自分たちを見守っている父親だったのです。

次に、自閉症の忠男が里村家に入ってしまったということで大騒動になります。本当は、忠男が庭で拾った隣の子草太郎の野球ボールを戻しに行ったのだが、里村家の親は、そのことに気づかなかったのです。もし、自閉症の人に対して偏見ではなく、そこにコミュニケーションがあったらこのようなことは起こらなかったことでしょう。

また、親子が共倒れにならないようにと母珠子が決心して、忠男をグループホームに預けます。しかし、あることがきっかけでグループホームを出ていった忠男と塾帰りの草太郎が出会い、二人が乗馬クラブの馬場に入ったことがきっかけで馬が逃げ出し、地域住民を巻き込む問題となる場面があります。この時には、グループホームの前で地域の人々が、「ここから出ていけ！」と言ったり、ホームの人が地域の人に挨拶をしても無視されたりという場面が出てきています。もちろん、これはドラマですが、実際に同じようなことが起こっているかもしれません。

タイトルの「梅切らぬバカ」は、本来なら切った方がいいに決まっている枝でも、私たちの生活の中で当たり前になり切り捨てられる人や考えが、実は、大切にかけがえのないものだということを教えているような気がします。本当に相手のことを知った時、また、知る努力をした時、初めてコミュニケーションが生まれるのではないのでしょうか。

今回、シグニスの映画選考委員会では、私たちが障がいを持った人たちを、排斥するのではなく、人として理解し合うというキリストが伝える「愛」、「福音」を皆さんで分かち合うことができたらという意向でこの作品を選びました。
 (映画チーム Br.井手口 満)



『梅切らぬバカ』公式サイト <https://happinet-phantom.com/umekiranubaka/>

※新型コロナウイルス感染症の収束が見えない状況のため、現在のところ公開での授賞式および上映会は予定しておりません。

第26回インターネットセミナー

酒井司教様とともに教会の広報について考える
2022年2月19日(土)

「教会とインターネット」セミナーを、今年も無事に開催することができました。昨年は完全オンラインでしたが、今回は四谷の聖パウロ修道会若葉修道院をリアル会場とし、全国の多くの方々にもオンラインでご参加いただく形での開催となりました。参加者は、カトリック教会信徒を中心に60名ほど、また、近年の講師にプロテスタントの先生方をお招きしていたこともあり、プロテスタントの方々も多数参加され、期せずしてエキュメニカルな場となりました。

講師には、新たに広報担当司教に就任された酒井俊弘司教様をお迎えしました。このセミナーに司教様にご登壇いただくのは、2015年に勝谷太治司教様以来7年ぶり。通算では7人目の司教様でした。また、酒井司教様の地元大阪大司教区や西日本からの参加者もお迎えできました。

やはり、いわゆるコロナ禍を契機として、こうした分野への関心が高まっていることを強く感じました。この数十年にわたって様々なインターネット宣教の実践が現れましたが、今こそ正念場なのかもしれません。

広報担当の司教様としてのメッセージ

司教様のご講演では、まず広報に何より大切なこととして、最近のフランシスコ教皇のご発言や世界広報の日のメッセージから、(逆説的なようですが)「聞くこと」を大切にすること、そして、人と人をつなげる情報発信の秘訣として、「汗のような人の匂いがしてくるような情報」を届けることという、二つが強調されました。メディアにとって大切なこととは、人間にとって必要なことでもあるのです。

セミナーでは、コミュニケーションを考えるために、その逆に、コミュニケーションの一切ない状態を考えました。それはどんなところでしょうか。すなわち、地獄です。誰もいないところです。神様はもちろんのこと、誰ともつながりのないところこそ、地獄です。いわば、コミュニケーションのために天国に行くと言ってもいいくらい、人間にとって最も大切なことは、人とのつながりなのです。それが世界広報の日の教皇様のメッセージでも強調されていることをご紹介くださり、そのために心がけることとして、話すよりも前に、身近な誰かに耳を傾けること、そして誰かのために時間を割くという、今シノドスのプロセスとして実践されていることを教会全体の姿勢にしていこう、と呼びかけられました。

その上で、バチカンニュースやローマレポートなどのいくつかの事例を引きつつ、「人の匂いがするような情報」こそ、人を動かすのだと指摘されました。いずれの観点も、複雑さを増していく情報社会の中で、そしてまた新型コロナウイルスによる隔絶化された社会を体験した私たちにとって、きわめて重要なメッセージでした。



四谷会場から講演される酒井司教様
左上はオンライン参加の画面

セミナーを通して見えてきた、シグニスの課題

ところで、2021年度の「教会とインターネット」セミナーは、実は年度内に二回開催をしようと、当初は考えておりました。そのうちの一回は、何らかの形で教会HP・SNS担当者の交流会にしたらどうかと検討を重ねておりましたが、機会を逃し、年度末も差し迫った2月19日という今回の日程で、講演会と交流会を兼ねるような形を追求する姿勢で、当日を迎えました。

しかし、Zoomの機能を生かして小グループに分けての交流会にするという方式はとらず、つまり小部会ごとにそれぞれが自由に発言するというようにはせず、希望すれば全員が司教様に話を聞いてもらえる、という形を取りました。結果的には、よっぽどのメディアのプロをのぞいて発言しづらくなってしまったようです。また(シグニスインターネットチームには教員が多い割には)発言をうながすような発問もできず、イベントとしては課題が残った面もありました。

司教様の講演の中にも、また質疑応答の中にもあった話題なのですが、「実務の人たちのネットワークがあれば」すばらしいと思います。つまり、広報の担い手として、司教様の言われるように「人々と神様をつなぐことができたらすばらしい」のです。シグニスの使命としては、そのような担い手同士をつなぐことこそが求められています。

カトリックメディアのためには、カトリック出版連絡協議会が存在しています。しかしよりミクロな観点で見れば、各教会の広報の現場にいるHP担当者、SNS担当者がおられます。そうした皆様に横のつながりをお持ちいただいて、知恵と情報を共有することができれば、新たに、あるいは改めて、聖霊が息吹く場が与えられることでしょう。

そのような今必要な事業のために、シグニスを受け皿になることができれば尚更すばらしいのですが、現状のチームには、イベントコーディネーターや橋渡し役などの力量が必ずしも足りていません。こうした課題が露呈した今回のイベントでもありました。最前線で教会広報に関わる信徒の皆様を結ぶ人間こそが、まさしくメディア(仲介者)となって、支え合う要(かなめ)になっていく。様々な意識される教会広報の現代的な課題に、ともに挑戦していく仲間が与えられることを切に願います。

(インターネットチーム 石原良明)

『福音的な映画とは何か』 松本准平監督



開催日：2022年2月26日（土）／ 開催場所：カトリック浅草教会・オンライン

講師プロフィール

長崎県のカトリックの家庭に生まれ、幼少期からキリスト教の影響を強く受ける。NPO 法人を設立し映像製作を開始して以降、根源的かつ普遍的なテーマで個性的な作品を発表。第40回香港国際映画祭（2016）、第76回ヴェネチア国際映画祭（2019）でシグニス賞審査員をつとめる。（松本監督のHPより一部抜粋）

2020年春以来、私たちはZoomを使ってのオンライン会議、講演会にも慣れてきました。そこで、Zoomを利用したメンバーの勉強会を開催しました。

当日、浅草教会に集まった人々は松本准平監督、晴佐久昌英神父、伊藤淳神父を含め8名、オンラインでの参加は大阪の酒井司教様を含め6名。松本監督はまず自己紹介で、長崎のカトリックの家庭に生まれ、キリスト教の影響を強く受けたと語った。

本題では、なぜ映画に惹かれて映画監督になったかをパワーポイントを使いながら、ご自分が強い衝撃を受けた映画、祈りを感じた映画、嘘でも真実の感動の与えてくれた映画を、YouTubeで予告編を紹介しながら、ひとつひとつの映画についてご自分の感動の源はどこかを熱っぽくお話くださった。そして監督個人の「祈り」の物語が「現実」の中で映像となり、その「祈り」と「現実」が織り交ぜられるとき、神の恵みとその映像の真っ只中または狭間に、否定しようのない形で刻み込まれることがあり、それは福音的な映画と呼べる、と定義した（松本監督の仮説を簡略表記）。倫理的な映画 ≠ 福音的な映画、映画は祈り、とのお話に我々は松本監督の熱い思いを感じ取りました。

何人ものメンバーからは、もっとお話を聞きたかった。またいつか機会を作って欲しいとの声が聞かれました。改めて松本監督に感謝です。

（事務局長 町田雅昭）



講演の様子
カトリック浅草教会

「福音的な映画とは何か？」今回の松本監督のお話のテーマです。私も映像制作に携わっていますが「福音的」という思いで制作をしたことも、「福音的」だからという理由で映画を観たこともありません。「福音的な映画とは？」知りたいと思っていました。松本監督はお話の中で、「観念的な映画を作っていたが、観念は映らない」と語られましたが、監督の作品『パーフェクト・レボリューション』は決して観念的な映画ではなく、娯楽性も備えた感動作でした。この映画を監督は人に頼まれて作ったそうです。「その人のために映画を祈るように作った」監督のこの言葉に心打たれました。祈るように映画を作る。これに似たような経験が私にもあります。私も「その人のために映画を祈るように」作ったことがあります。映画が完成した時、その人に感想を尋ねると「映画がよく出来たかどうか私にはわかりません。この作品は私の“子ども”みたいなものだから」という答え。私は今もこの言葉を忘れることができません。祈りと現実の狭間に生まれる尊い何か。それが「福音的な映画」なのかもしれません。（映画チーム 鈴木 浩）

当日紹介された 松本准平監督作品（一部）



『まだ、人間』/2011年



『最後の命』/2014年



『パーフェクトレボリューション』/2017年

2019年ヴェネチア国際映画祭にて
SIGNIS 賞審査員
右から2人目が松本監督

